

## □最近の活動状況

## 【新年懇談会】

— 1月15日(金)ザ・セレクトン福島 —

テーマ 「アベノミクスと日本経済の今年の展望」

講師 公益社団法人経済同友会

副代表幹事・専務理事 横尾 敬介 氏

参加会員数 44名

講演会に先立ち、浅倉代表幹事が「今年は、株安や原油安など波乱の幕開けとなった。今まで以上に変化に立ち向かいより適切に対応していくことが求められる」と挨拶されました。

続いて、横尾敬介・経済同友会副代表幹事・専務理事の講演会を開催しました。

その後の懇談会では、中尾根顧問の音頭で乾杯し会員同士の親睦を深めました。中締めにて渡部代表幹事が「今年は集中復興期間から復興・創生期間に入る。共に元気を出して力を合わせていこう」と挨拶されました。

以下、講演会の要旨を掲載します。



講演会場風景

## ○2016年の世界経済

世界経済の注目点としては、米国の利上げ、中国の人民元安をはじめとする新興国の減速、資源価格の低下の3点があり、これらが良くも悪くも影響を及ぼすと考えられます。また、「Gゼロ時代」における地政学リスクにも注目する必要があります。リーダー不在という状況の中で、中国やロシアの台頭、「イスラム国 (IS)」などによるテロの脅威は、世界経済にとっても大きなリスクとなるでしょう。

## ○アベノミクスと日本経済

資源価格の低下は日本経済にとってプラスとなり、景気は緩やかに回復するという期待感がありますが、個別の数字を見るとそう簡単ではないとの印象を持っています。

アベノミクスの「旧・三本の矢」は、「10年間のGDP成長率目標」「2020年度のプライマリー・バランス黒字化」「2年でのインフレ目標達成」と定量的で期限も明確でした。しかし、どの目標もハードルは高く、達成が危ぶまれています。

「新・三本の矢」の評価は様々です。具体策がないため「旧・三本の矢」よりも分かりにくいという評価もあります。小林喜光代表幹事は「『矢』というよりも『的』であり、政策目標に近い一つのスローガンである」と言っています。



講師 横尾 敬介 副代表幹事

経済の重要な要素の一つである雇用に焦点を当てると、完全失業率は20年前の水準にまで低下し、安倍政権誕生後から労働力人口・就業者数はともに増加に転じています。これを男女別に見ると、女性の非正規雇用が雇用拡大を牽引していることが分かります。ただし、非正規雇用は賃金の上昇ペースが緩やかなため、好循環につながる力強さがあるとは言えない現状です。

日本の企業収益は高水準ですが、経済の成長率はなかなか上がっていません。アベノミクスは過去の景気拡大局面と比較して最も成長率が低い状況です。

これは公的需への依存度が高く、個人消費が弱い  
ためです。一方、企業収益はアベノミクスの下で確  
実に増加してきたと言えます。

グローバル企業は、海外投資を増やす傾向にあり  
ますが、設備などの有形固定資産を減らす一方で、  
海外に出資し、株式の保有を増やしています。この  
ため、企業収益が増加しても、国内の期待成長が低  
い中で、国内投資を活発化することはなかなか困難  
だと思ひます。

### ○新たな進路を拓く

今年の4月に東京の経済同友会は創立70周年を  
迎えます。小林代表幹事は、その就任挨拶の中で、  
1945年から2015年までの70年間を「Japan1.0」と  
呼ぶことにすれば、東京オリンピック後の2021年  
からの「Japan2.0」に向けて、これからの5年間を  
「Japan2.0」に向けて大胆な改革を行う期間と位置づ  
けました。本年が新たな進路を拓く1年となるよう、  
活動を展開して参ります。

「Japan2.0」の柱は持続可能性です。サステナブル  
な社会に向けて、特に重要なのは「経済」「財政」「地球」  
の持続可能性です。「経済」は経営革新と成長戦略の加  
速、「財政」は社会保障と税の一体的な「再」改革、「地  
球」は温暖化効果ガスの排出を実質的にゼロにするこ  
とです。

ここで注目すべきは「個」の存在です。明確な意思  
を持った「個」が集まり、主体的な「集団」となって問  
題解決へ向かって、個人と組織、企業と社会、国家

と世界などの間で対立する利害を乗り越えていくこ  
とが必須と考えています。

### ○「Japan2.0」への一步を踏み出す

活動の一つとして、まず、GDPでは補足できない  
経済的効用の本質や各種政策の基礎になる統計のあ  
り方に関する議論を進めていきます。

また、引き続き被災地ならびに地方創生の現場を  
訪問し、自治体や企業関係者等との意見交換を重ね、  
地域の目線に立った息の長い連携・支援のあり方を  
考えていきます。

これらを通じて、グローバル化、IT化、ソーシャ  
ル化という3つの世界的な変革のうねりの中で、目指  
すべき将来ビジョンを取りまとめ、国内外に広く発  
信していきたいと考えています。



懇親会風景

### 【第2回東北ブロック広域観光分科会】

— 2月16日(火)

仙台市 ウェスティンホテル仙台 —

昨年10月開催の第1回議論を基に作成された提言  
案について、各県観光担当者をお招きし意見交換が  
行われました。

その後、九州観光推進機構会長の石原進氏を講師  
にお迎えし「九州広域観光推進機構の取り組みと課  
題」と題し講演会が開催されました。

当会からは渡邊常任幹事と大村会計幹事が出席し  
ました。



会場風景

【第8回朝食懇談会】

— 12月9日(水) ホテル辰巳屋 — テーマ 「じょーもぴあ宮畑～史跡整備の歩みと今後の展望～」  
 講師 福島市教育委員会  
 文化課長 齋藤 義弘 氏 参加会員数 41名

平成27年8月8日に全面開園した「宮畑遺跡」は、体験学習施設での縄文人の生活に関する展示や、屋外での建物等の復元展示のほか、約3,500年前の土器の発掘状況を実物で見ることができる露出展示を行っています。その開園に至るまでの整備について、縄文時代の生活状況の解説を交えてご説明されました。

今後も「福島市民と協働で、他の史跡との差別化や話題づくりに取り組み、全国へ『福島市の魅力』を発信し、地域活性化・観光・まちづくりにつなげたい」とお話されました。



講師 齋藤 義弘 課長

【第9回朝食懇談会】

— 2月24日(水) ザ・セレクトン福島 — テーマ 「地域に根ざしたスポーツの力で元気と笑顔を」  
 講師 株式会社福島県民球団  
 代表取締役社長 扇谷 富幸 氏 参加会員数 43名

「福島ホープス」は、平成27年にプロ野球独立リーグルートインBCリーグへ新規参入し後期優勝を果たしました。

その球団運営や、日本と世界の舞台で活躍してきた岩本明憲氏を監督兼選手として迎えた経緯などを振り返り、「福島県の子どものたちの目標となる球団を作りたい」と熱い思いをお話いただきました。



講師 扇谷 富幸 社長

□事務局だより

平成28年1月～3月に入会・変更のありました会員を紹介します。(敬称略)

新規入会		平成28年2月入会 わたなべ しんいちろう 渡邊 新一郎 ザ・セレクトン福島 執行役員総支配人	会員交代		平成28年3月交代 いがらし かずひこ 五十嵐 和彦 日東紡績(株) 執行役福島工場長
------	---	---	------	--	---

引き続き会員増強にご協力をお願い申し上げます。(平成28年3月25日現在 会員数79名)

編集日誌

- ◇春です!! お花見の季節がやってきました♪
- ◇福島市のお花見と言えば「花見山公園」が有名です。写真家の秋山庄太郎氏が「福島に桃源郷あり」と形容したことから、国内のみならず海外からも多くの方が訪れる桜の名所となりました。
- ◇小学校の時、春の遠足で「花見山」へ行った記憶がありますが近年は足が遠のいています。今年は、当会ホームページに「福島の桃源郷」を載せたいので写真を撮りつつ春を満喫していきたいと思います。(今野)

## □会員企業紹介 【第10回 東北電力株式会社】

今回は東北電力株式会社福島支店の林支店長にインタビューしました。4月から電力小売り自由化が始まりましたが、それに向けた取り組みや人材育成についてお話を伺うことができました。

### ○お客さまのご要望に「より沿う」サービスを

当社は昨年10月に、電力の小売り全面自由化を見据え「お客さま・地域の声にしっかりお応えしていく」という企業姿勢を示す、新たなコーポレートスローガン「より、そう、ちから。」を公表いたしました。



林隆壽 執行役員福島支店長

これには2つの意味を込めており、ひとつは、「お客さまのライフスタイルに合った『より沿う』新しいサービスを提供する」ことです。具体的には、今年4月から新たな料金プランやWebサービス、新ポイントサービスをご提供させていただいています。お客さま一人ひとりの話をお伺いして、ご要望に沿ったサービスの提供にさらに磨きをかけて参ります。

### ○地域に「寄り添う」企業として

当社の源流は会津地域における水力発電開発にあり、創立以来「東北の繁栄なくして当社の発展なし」の考えの下、地域の皆さまとともに歩んで参りました。先にご紹介しました「より、そう、ちから。」のもうひとつとして、「東北6県と新潟県の成長・発展に『寄り添う』取り組みを展開する」こととしています。電力が全面自由化され、競争の時代を迎えるからこそ、地域の振興・発展に貢献していくことが、これまで以上に大切な取り組みと考えています。

### ○変革への挑戦とDNAの継承

お客さまから当社を選択していただくためには、全社員がお客さまの目線に立ち、業務を展開していく必要があります。

社員一人ひとりが「お客さまの視点」を一層重視しつつ、企業グループ全体のメリットを考える「全体最適の視点と柔軟な発想で変革に挑戦できる人材」の育成を図っていかねばならないと考えています。

少し手前味噌ですが、東日本大震災の発生後、停

電の早期解消や甚大な被害を受けた火力発電所の復旧など、当社の社員には任務の貫徹力や突破力などが備わってきていると感じています。今後の競争下においても、そうした実力が発揮できるように企業としてのDNAをしっかりと受け継いでいくことが必要と考えています。

### ○安定供給が第一

これまで当社が長年に亘り電気事業を営むことができたのも、お客さまや地域からの信頼をいただけたからこそと考えています。その基盤となっているのは「安定供給」です。電力の小売り全面自由化により、電力業界の様相は大きく変わりますが、「お客さまに安定した電気をお届けする」という当社の使命は変わりません。今後とも、地域のインフラを担う企業として、コーポレートスローガン「より、そう、ちから。」の下、皆さま、そして地域のお役に立てるよう努めて参ります。



住 所	〒960-8524 福島市栄町7-21
設 立	1951年5月
従業員数	1,613名
T E L	024-522-9151
U R L	www.tohoku-epco.co.jp